

ヴァイキング時代の交易定住地遺跡カウパングをめぐって

熊 野 聰

Kaupang, a trading "town" in the Viking age

—Report on a lecture by prof. Dagfinn Skre, Oslo University—

Satoru Kumano

オスロー南西部の交易地遺跡カウパングの発掘プロジェクトは 2000 年に始まり、2002 年で発掘作業を終え、あとは分析と報告刊行の仕事が残っている。プロジェクト責任者である考古学者ダグフィン・スクレー（オスロー大学教授）の講演会が、2003 年 3 月 25 日（火）、京都大学人文科学研究所にておこなわれた。

講演は 2 つに分かれた。前半は、人文研のプロジェクト「初期王権」にかかわって、ノルウェーとスカンディナヴィアにおける最初の王権の形成、最初の国家形成と都市化（urbanization）の関連を、汎ヨーロッパ的視野の中に位置付けつつ展望したものである。北欧の都市化は 2 つの波に区分することができる。第 1 の波は 8 世紀末に始まり、遅くとも 11 世紀には終わった町（town）の形成で、中世都市へと連続しなかった（デンマークのリーベ、ヘゼビュー、およびスウェーデンのビルカ）。第 2 の波はノルウェーのテンスブルグ、トロンハイム、ベルゲン、オスローのように、11 世紀以後に王権のイニシアティヴで成立し、今日にまで連続している中世都市の形成である。王権および国家と都市化の関連を論ずることのできる意味での都市化は第 2 の波であるが、これから述べるカウパングは第 1 の波に属し、この遺跡は 8 世紀末に発生し、900 年ころ、あるいは 10 世紀の初期に途絶した。

遺跡の所在する場所の地名カウパングはそれ自体「商業」（kaup）と関連している。しかし最古の交易地としてのこの場所は史料上シーリングサル（Skiringssal）とよばれている。（古北欧語、あるいは純学問上の再建発音ではスキーリングスサル Skíringssalr であるが、スクレー教授は無造作にノルウェー語でシーリングサルと発音していた。この論点自体についてはここでは省略。）史料初出は 9 世紀末の「オットルの口述」（『アルフレッドのオロシウス』）である。この地は 13 世紀初めにアイスランドの歴史家スノッリ・ストゥルルソンの書いた「ユングリング・サガ」にも、ノルウェー統一王権成立（9 世紀末）以前にオスロー南西部にあった小王権

の中心地（王の被葬地）として述べられている。地名前半要素シール（古北欧語スキール）は「光り輝く」で、おそらくフレイ神を表し、この地は宗教上の中心地でもあったと考えられる。後半要素サルは首長など有力者の館である。カウパングは表層遺物から交易と手工業の中心地であったと古くから考えられ、シーリングサルと同一視されていた。19 世紀に遡る考古学調査の中心は墓に置かれ、これまで発掘された墓は火葬墓と土葬墓に大別される。1950 年代、60 年代におこなわれた発掘によって6つの建造物が調査された。建物の形状はやや彎曲して中央部が膨らんだ2つの長辺をもつロングハウスで、船をさかさまにしたような、デンマークに知られた形である。これら6つの家屋には内部に暖房・料理用の炉、竈の跡がなく、定住用とは考えにくかったこともあって、この商工業的要素の強い集落遺跡が永住的な定住地か、それとも夏季だけの季節的営業地（サマーキャンプ）であったかが問題とされ、このときの発掘責任者シャーロット・ブリンハイムをはじめ、どちらかといえばサマーキャンプ型とする意見が強かった。

今回は、9世紀の水際線を考慮に入れて、定住地内のより外海側を発掘した。その結果、顕著な特徴が検出された。第1に、3つの、炉をとまなうロングハウス（つまり北欧の農家とおなじ構造）がみつかった。家屋は支柱を立てて屋根を葺くタイプと丸太を重ねて壁を作る（ログハウス型）工法の家屋が検出された。前者は屋根の重みを柱で支えるものであるが、後者は壁で支える。構造物の工法の違いはエスニシティの違いかもしれない（前者はデンマーク、後者はデンマークより北のタイプ）。第2に、厳密なこの遺跡ブロックの発展過程を検証することができた。すなわち発掘された建造物からみてこの場所は、8世紀末から使用され始め、はじめは炉のない、サマーキャンプタイプの交易地であったが、それが820、830年ころから炉をもつ永住型の町（town）へと発展し、870年ころにはふたたび非定住型のサマーキャンプ型交易地に戻った、と思われる。今回も、50年代末におこなわれた前回と同様、調査されたのは定住面積のごく一部だけであるが、しかし今回、この遺跡は、比較的短い期間だけのこととはいえ、たんなる交易地ではなくて町（タウン）であったことが確認された、とスクレー教授は強調する。

本来は交易地であったものが、いかなる条件があって町になったのが重要である。個々の建物敷地は個別の家族が使用したと思われるが、敷地は初めから計画的に区割りされている。つまり人が住むようになってしだいに区割り関係が発展したのではなく、誰かイニシアティブをとった者（権力者）が永住地を作ろうとしてまず屋敷地の区割りを設定し、そこに居住者が集められたと思われる。

フランク王国年代記の808年の項に、デンマーク王がスラヴ人の町レリクを破壊し、その商人をヘゼビューに住ませた、とある。南東ノルウェーのカウパングでも、似たような権力の関与が想定されるが、その権力者がデンマークの場合のように王であったかが問題である。

カウパング＝シーリングサル成立に役割を演じた権力者が誰であったかを考えるにあたっては、遺跡近くにあるフーセビーの地名が注目される。フーセビーはスウェーデンのウップランド地方とノルウェーの南西部を中心に北欧各地に分布し、王権の地域支配の拠点となった農場であると考えられているが、そのようなものとしてのフーセビー制度は 11 世紀以後というのが現在の定説で、カウパングの 9 世紀にはまだそのような組織はなかった。したがってカウパング遺跡に隣接するフーセビーは、はじめは豪族の農場であって、のちに王権の支配する農場になったのかもしれない。現在観察することのできるフーセビーは砦の機能ももった大農場であり、非常に生産性が高かった。この農場の 8 世紀末から 9 世紀の主人が、カウパング＝シーリングサルという交易地機能をもった町の建設者であった可能性が高い。

講演の後、質疑がおこなわれ、また懇親会でもフランクなディスカッションが継続されたが、そのうちわたくしが関心をもった点を挙げておく

1) 王もしくは豪族が交易地カウパングのスポンサーになった動機はなにかとの問いに対して、スクレー教授は、交易をおこない、交易地をもつメリットは、入手したもので暮らすためではなく（直接的消費のためでなく）、威信を示す贈与物を入手するためであると答えた。かねてわたくしは、ヴァイキング時代の交易の目的は商業利潤ではなく、必要なものの入手で、その「必要」には、直接的消費のための必要だけでなく、威信財という豪族にとっての社会的必要が含まれることを指摘してきた。今回の発掘以前にはカウパング遺跡の建物に炉ないし竈が検出されず、交易地の永住性に疑問があったのであるが、820 ないし 30 年ころから 870 年ころのあいだに関するかぎり、永住性のある町（タウン）が確認できたとスクレー教授はいう。それにもかかわらず、そこで展開された交易の社会的性格については変更の必要がないことになる。この点の評価はしかし、定住民のおこなった手工業の分析が進むと変わってくるかもしれない。

2) 住民は食料について自給の側面が強いと思われる。第一に各家屋の敷地内で家畜が飼われていた。骨の精密な分析はつい先頃ヨークに依頼するために、骨を搬出したばかりのところであるが、家畜のおそらく半分は豚である。羊、山羊は合わせて 20 % くらい。野獣（大鹿・エルク）は予想に反して驚くほど少ない。魚も少ないが、魚の骨の大量堆積が一つだけみついている。近隣農民との交換で食料がえられた可能性もゼロではないが、推論の一つにすぎない。

3) 交易地カウパングのプロモーターとしての権力が、フーセビー農場の豪族ではなく、もっと広い地域をカバーする王権であった可能性について。9 世紀末にはじまるノルウェー最初の統一王権はユングリング王朝である。この王朝は統一事業に乗り出す前はオスロー南西のヴェストフォル（カウパングもここに属する）の王（地域王、小王）であったと伝承にいわれ

ている。カウパングの北東にはボッレという大古墳の集中する遺跡があり、ボッレとシーリングサルの2カ所は、伝承（ユングリング・サガ）によれば、この地方の小王家ユングリング家の祖先が葬られた場所である。したがって交易地カウパングの建設者としてユングリング家を考えてみたいところであるが、ユングリング家がヴェストフォルの王であった証拠は伝承以外になく、統一後の王権（ユングリング家）の中心地は西部地方（ローガラン、ホルダラン）である。同王家が伝承の通りヴェストフォル出身であったと仮定しても、ハーラル美髪王が全国統一に乗り出す時期にカウパングの非定住型市場（いちば）への衰退が起こっている。すなわち王権の発展が交易地の発展になっていない。

4) もし広域権力としての王権を問題とするなら、オスロー以南のノルウェーは9世紀にはデンマーク王国の影響下にあった事実の方が重要であろう。カウパング周辺に分布する墓の2大類型は、エスニックな違いを表すと思われる。交易拠点は一般に諸民族の境界に成立する。ヘゼビューはデンマーク人とザクセン人、オボドリド人の境界地であり、リーベはフリース人とデンマーク人の境界地である。（ビルカがスウェーデン人とロシア人の境界地と教授はいわれたが、ちょっと納得がいかない。むしろスウェーデン内のスヴェーア人とイエート人の境界に思われる。）この考え方が成り立てば、カウパングの消長にはヘゼビュー交易圏の動向が関係していたのであろう。

以上のほかに、問題の設定の仕方がまだわたくしにはよくわからない以下のような問題も、列挙だけはしておきたい。

5) 用語法の問題：都市（city）と町（town）。スクレー教授はノルウェーにも「町」があったことを強調し、どうやらデンマークにヘゼビュー、スウェーデンにビルカがあって、ノルウェーにその対応物がないことに民族的コンプレックスをもっているかに感じられた。この種の民族主義に根拠があったとしても、town でいいのかな、と疑問に思ったが、十分議論することができなかった。あとで思い返しても、教授のいう「町」は村の対比ではなく、一時的で仮設的な市場（いちば）との対比でしかない。じっさい北欧において、都市（city）の発生に帰結する歴史は、彼のいう町から発展したものではない。

研究会側のテーマ「初期王権」にサービスしてスクレー教授は、ヨーロッパ全域的な規模で都市の成立と王権の関係を概観してくれたが、ノルウェー史としてはこれにかかわるのは都市化過程の第2波であって、カウパングはそれに先行する第1波であることを明言されたので、問題の焦点は割合に細かなノルウェーもしくはスカンディナヴィアの話、およびそれらと日本の比較に集中した。こういうテーマが日本で、多くの若い考古学研究者の前で話されたことはかつてなかったことであり、貴重な第1歩であったと思う。

同教授が日本で講演することになったきっかけは、2002年の夏に3人の日本人研究者が現地

を訪ねたことである。「環バルト海研究会」は隔年に現地調査をおこなってきたが、02年度の調査は北西ロシアのサンクト・ペテルブルク、ノヴゴロド、スターラヤ・ラドガであった。その参加者のうち市原宏一（大分大学助教授）、角谷英則（津山高専講師）、熊野聰（名古屋大学教授）（所属・地位はいずれも当時）の3人はコア調査の前にオスローに集合し、カウパングを訪問した。現地を見学し、説明を受け、スクレー教授と意見を交換した。その折に本人の口から、教授が弓道をやっておられ、来年（03年）の春に、宮崎県の都城でおこなわれる大会に出席することを伺ったのである。帰国後3人は、教授来日の機会に講演会を開催できないか話し合い、角谷が、自分の参加している京大人文研の初期王権プロジェクトに相談したところ、主催を引き受けていただけることとなった。関係機関ならびに関係者各位に感謝申し上げる。